

研究課題

分かるといいな，伝わるといいな，ぼくの・わたしの思いや願い

副題

～タブレット端末活用を通じた学習支援と学校間連携で推進するコミュニケーション能力の育成～

キーワード

レッツ コミュニケーション

学校名

美馬市立江原南小学校

所在地

〒779-3602
徳島県美馬市拝原字829

ホームページ
アドレス

<http://e-school.e-tokushima.or.jp/mima/es/eharaminami/html/htdocs/>

1. 研究の背景

美馬市立江原南小学校は，平成28年1月現在で，全校児童241名，通常学級10学級，特別支援学級2学級で構成されている。ICT環境については，通常学級には電子黒板機能付きの46インチデジタルテレビと書画カメラ，ノートパソコンが導入されている。また，特別支援学級には電子黒板機能付きのデジタルテレビ，ノートパソコンの他に，プリンタ，本年度からタブレット端末が複数台導入されている。ソフト面では，デジタル教科書が全学年に導入されており，これらのハードとソフトを活用した授業実践が日常的に行われている。また，本年度，タブレット端末が美馬市内全域の特別支援学級に備えられ，児童一人ひとりの発達段階に応じた学力・コミュニケーションスキル習得のために欠かせないICT機器として，その利活用を図ることが推進されている。

2. 研究の目的

1のような環境の下，本校の教職員は校内外の研修を通して，導入されたICT環境の授業実践への活用等について習熟を図ってきており，児童もその恩恵を十分享受し，着実に情報活用能力の育成が図られつつある。本年度は「表現力の育成」を研究テーマとして，子どもたち自らがICT機器を活用しながら自分の伝えたいことを適切に表現できるように，教師の支援の在り方を模索している。

中でも，特別支援学級において美馬市内の先鞭を切って本年度から導入されたタブレット端末の活用については，特別な支援を必要とする児童一人ひとりのニーズに応じた適切できめ細やかな教育を推進する上で欠かせないものであるとの共通理解の下で，学力の定着やコミュニケーションスキルの定着のための有効な活用方法について協議研究を続けてきている。また，タブレット端末を単なる教材提示の道具とだけ考えるのではなく，美馬市内の他の小学校の特別支援学級と連携を図り，児童が自分の考えや願いを，相手の立場を尊重しながら相互に伝え合うための手段として活用することを目指し，本研究を実践することとしたい。

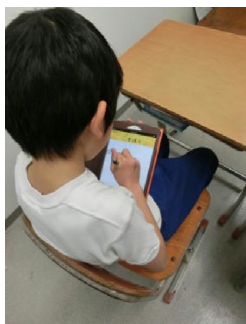
3. 研究の方法

- (1) 特別支援学級に在籍する児童や，通級指導を受けている児童が，日常の授業実践の中で，継続的に個々の学習面・生活面における教育的ニーズに応じてタブレット型端を利活用することで，学習効率の改善向上や生活能力の習得定着を図る。

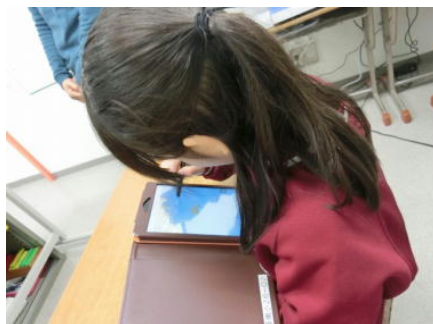
- ・特別支援学級における国語科・算数科の日常的学習指導でのタブレット端末の利活用
 - ・特別支援学級における生活単元学習でのタブレット端末の利活用
 - ・通級指導における学習指導でのタブレット端末の活用
- (2) 本校特別支援学級に在籍する児童と市内研究協力校の特別支援学級に在籍する児童との協働学習により、相互コミュニケーションの機会を充実させ、児童一人ひとりの発達段階に応じた思考力・コミュニケーションスキルの継続的な習得を図る。
- ・物語作成教材「ストーリースターター」を利用した物語創作を通じた構成力・思考力の養成
 - ・ストーリー撮影～専用アプリでのアニメーション作成の過程における、タブレット端末の効果的利活用
 - ・タブレット端末を利用したビデオ会議による市内研究協力校特別支援学級在籍児童との相互コミュニケーションの推進
- (3) タブレット端末を利用したビデオ会議による県立特別支援学校との協働学習の推進を図り、授業内容・指導方法へのリアルタイムでの専門的支援の充実を図る。
- ・ビデオ会議システムによる本校特別支援学級の授業への県立特別支援学校教諭の参加
 - ・ビデオ会議システムによる県立特別支援学校の授業への本校児童・教職員の参加
 - ・合同研修会の継続的实施
- (4) 先進校視察
- ・ICT機器の授業への積極的利用を推進する義務教育諸学校への視察

4. 研究の内容・経過

- (1) 特別支援学級在籍児童、通級指導を受けている児童のタブレット端末利活用による、学習効率の改善向上や生活能力の習得定着。



国語で



社会で



生活科で



休み時間の補充学習で

児童個人の教育的ニーズに応じた場面で、適切な支援を行うためにタブレット端末を日常的に利活用。

(2) 本校特別支援学級に在籍する児童と市内研究協力校の特別支援学級に在籍する児童との協働学習によるコミュニケーションスキルの継続的な習得。



第1回協働学習

初めての協働学習では、自己紹介を中心にお互いの名前を確認。



第2回協働学習

今度は互いに創作したレゴブロックの作品を紹介。

※ 第3回協働学習からは、タブレット端末を、全体指導とグループ活動の2つの場面で同時使用する。そのために同時利用回線も2回線とし、スムーズな協働学習(個別と全体)の実施を図れるよう配慮する。



第3回協働学習

相互アドバイスをを行い、それに基づいてリアルタイムで修正。



第4回協働学習

前回のアドバイスを基に、グループで制作し発表。



第5回協働学習(公開授業)

授業公開。相互アドバイスと修正, 制作。最後に相互評価。

2台のタブレット端末を全体と個別の2回線で同時利用

(3) タブレット端末を利用したビデオ会議による県立特別支援学校との協働学習の推進。

本年度実施に向けて協議を行ったが、通信回線とセキュリティの問題が有り、実現には至らなかった。
次年度に向けての課題としたい。

(4) 先進校視察



場面毎の課題や資料の提示、これまでの学びや経験の想起などの場面で、本校で「今ある機器を活用するとどのように効果的に使えるか」という視点で対比しながら参観。

子どもたちにとって学びのきっかけや、進め方、まとめのしかたはその学習内容によって ICT が有用であったり、紙や板書が有用であったりする。附属小学校での模造紙やノートを使った学習のまとめや教室掲示は、これからの授業や学級経営に

取り入れたいものであった。また、調べ学習で子どもが思いついたときにすぐに検索できるような環境が身近にあれば、さらに豊かな学びができそうな印象をもった。

5. 研究の成果 ～当初申告の成果指標に基づく考察～

(1) コミュニケーションスキルの習得について

①児童それぞれが相手の顔と名前を憶えることができる。

十分に達成できた。どの学年の児童も興味を持って会議に臨み、相手の顔や発言を意識しながら行動できた。

②児童それぞれが発達段階に応じて、ビデオ会議を通して自分の考えたことが伝えられる。

概ね達成できた。高学年児童は自分の考えを、相手の学習の段階に合わせてしっかりと伝え、相手にもそれが十分に理解された。

③児童それぞれが相手のことを考えた声の大きさや速さで話すことができる。

概ね達成できた。通信回線を通しての会話ということもあり、回線自体の安定の度合いによって、相手の声を聞き取りにくい場面もあったが、その度に身振りや筆記による意志の伝達をしながら、回線の回復を待つて会話しようと努力していた。

(2) タブレット端末の利活用をはじめとした情報活用能力の育成について

①児童それぞれが目的に応じたアプリの利用ができる。

児童自らが自分に合ったアプリを選択し活用するまでは難しい状況。与えられたアプリを授業のねらいに合わせて利用できるように教師側の配慮が不可欠であった。

②児童各自がビデオ会議へ関心を持って参加し、タブレット端末の特性に応じた対応ができる。

タブレット端末を通しての会話であることを特別に意識しないで、違和感なく授業に取り組むなど、特性に柔軟に対応できていた。概ね達成できた。

6. 今後の課題・展望

ストーリースターを使った協働学習を通しての作品作りを今後も継続する中で、特別支援学級在籍児童の「発言」「動作」「コミュニケーション」等の観点について、短期的にだけではなく、中・長期的な観察を基に児童の変化をとらえ、効果を更に検証していきたいと考えている。その際には授業の録画や録音等により児童の発言を定性的にとらえながら、効果について分析を進めていくことが大切だと感じている。

また、今回の研究は少人数でかつ他校の支援学級の児童との交流であった。児童一人ひとりを十分観察し、少人数同士でのコミュニケーションをタブレット端末を使うことにより、スムーズに支援しながら進めることができたが、日常的に校内で行われている特別支援学級の児童と協力学級の児童との協働学習は、一人と大勢という関係性になっている。実際にそのような場面におけるコミュニケーションのツールとしてのタブレット端末の利活用についても考察する必要があると感じられた。協働学習における学習効率の改善向上や生活能力の習得定着のためにも、今後実践を推進・検証する時間を確保していきたい。

7. おわりに

本校をはじめ、市内各校にタブレット端末が導入されるタイミングに本助成事業を活用することができたことは、タブレット端末の利活用が児童一人ひとりのニーズに応じた教育のために有効であることを検証するよい機会となった。

今回は本校と協力校の2校間の取り組みが中心となったが、この研究を基に、複数校との交流学习や、多人数での協働学習にその裾野を広げることができれば、よりよいコミュニケーションスキルの育成のための効果的な実践について、様々な方法や内容が想像できるのではないかと考えている。